

小学校における担任学年配置に関する 女性教師のステレオタイプの態度

深田 博己

(1991年9月10日受理)

Female teacher's stereotype-attitudes on the charge of grade class in elementary schools

Hiromi Fukada

The present study was designed to investigate female teacher's stereotype-attitudes on the charge of grade class in elementary schools. Survey 1 confirmed the actual conditions that most of lower grade classes were in the charge of female teachers but that most of higher grade classes were in the charge of male teachers. In survey 2, it was showed that female teachers had the stereotype-attitudes on the charge of grade classes that lower grade classes were suitable for female teachers to charge and higher grade classes were suitable for male teachers to charge.

Key words : stereotype-attitudes, charge of grade class, female teachers, elementary school.

問 題

小学校における教師の性と担任学年との関係のみてみると、低学年担任のほとんどが女性教師であり、高学年になるほど男性教師による担任が増加している(千葉県教育センター, 1969; 池田・福山, 1971)。低学年担任の教師の大部分が女性教師であるという担任学年配置現象は、“女性教師は低学年向き”とする固定観念が管理職層を含む教育界全体に広範に存在することを意味している。

“女性教師は低学年向き”という固定観念は、一つには女性教師の母性的資質に対する積極的・肯定的評価(女性教師は低学年の担任に適しているという評価)に基づくと解釈できる。こうした評価は、母性的資質のゆえ低学年を受け持たされていると受けとめている女性教師自身の報告(池田・福山, 1971)からも明白のように、教育界全体に存在すると推論できる。そして、同じ評価が世間一般にも根強く存在することは、親が低学年の担任には女性教師を希望し、高学年の担任には男性教師を希望しているという深谷・深谷(1971)の調査結果から推論される。

他方、“女性教師は低学年向き”という固定観念は、単に母性的資質の積極性・肯定的評価によって支えられているだけでなく、女性教師に高学年の学習指導は困難であるという消極的・否定的評価(女性教師は高学年の担任に適していないという評価)によって支えられていることは否定できない。こうした消極的・否定的評価に関しては、算数指導に及ぼす教師の性差は認められないと報告した研究(佐藤, 1976)があるものの、女性教師が自己の長所としてとりあげた指導能力には、学習指導に関係するものが少ないという指導能力の片寄りを指摘した研究(池田・福山, 1971)や、女性教師に低学年担任者が多いという実態から女性教師に高学年の担任は難しいかもしれないと短絡的に解釈した研究(千葉県教育センター, 1969)が存在する。

いずれにせよ、女性教師の母性的資質に対する積極的・肯定的評価と学習指導能力に対する消極的・否定的評価の両方が、多かれ少なかれ、“女性教師は低学年向き”という固定観念を支え、そうした固定観念が女性教師の低学年担任配置現象を生み出していると考えられる。

ところで、担任学年配置の問題は、単なる教師の性差の問題として片付けられてよいものであろうか。女性教師の母性的資質にしても、学習指導能力にしても、個人差を無視できる性質のものでないことは明白である。また、小学校の女性教師を対象とした池田・福山(1971)の調査によると、自分の適する学年を担当していると思う女性教師の割合は、低学年で最も低い。女性教師が最も多く担任させられている低学年で適性配置感が最低であることは、女性教師の担任学年配置が性差の視点から単純に取り扱われるべきものではなく、むしろ、個人差という視点から検討されるべきものであることを示している。

従って、教育界および世間一般に定着している“女性教師は低学年向き”とする固定観念は、早急に改善される必要のあるステレオタイプの態度であるといえる。このようなステレオタイプの態度を捨て去り、教師の性差ではなく、指導能力特性、パーソナリティ、担任希望学年などの個人差を考慮した適切な担任学年配置が実現されねばならない。

ここで重要なことは、池田・福山(1971)が示唆するように、“女性教師は低学年向き”という固定観念へ女性教師自身が埋没している可能性がないであろうか、という点である。なぜならば、もし、女性教師の間でのそうした固定観念の存在が事実であるとするならば、女性教師は自らのステレオタイプの態度によって、低学年担任への偏向配置という不適切な担任学年配置を助長していることになるからである。

それゆえ、適切な担任学年配置を実現し、適性配置感を高めるためには、“女性教師は低学年向き”とする

ステレオタイプの態度が女性教師自身の中に内在しているかどうかを、まず解明する必要がある。

従って、本研究では、小学校における担任学年配置の問題に関して、主として女性教師の側から次のような点を明らかにすることを目的とする。

(1) 小学校における担任学年配置に関して、教師の性による片寄りがどの程度存在するかを明らかにする(第1調査)。

(2) 女性教師の間に、担任学年配置に関するステレオタイプの態度が存在するかどうかを検討する(第2調査)。

(3) 担任学年配置に関する女性教師のステレオタイプの態度が存在するとすれば、それが、特性変数(年齢や性度)や認知変数(男性教師あるいは女性教師の指導能力に対する認知など)によって説明できるかどうかを検討する(第2調査)。

第 1 調 査

1. 目的

小学校における担任学年配置に関して、教師の性による片寄りがどの程度存在するかを、学校を対象とする実態調査によって明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象 島根県松江教育事務所管内(2市14町1村)の全公立小学校89校を調査対象とした。

(2) 調査手続き 郵送調査法によって、1980年9月に調査を実施した。有効回収率は89票で、有効回収率は100%であった。

(3) 調査内容 障害児学級を除く普通学級数および

表1 担任学年配置の実態

	男性教師			女性教師			計
	単式	複式	小計	単式	複式	小計	
低学年	1年	1	0	2	(0.7)	148	299
	2年	1	0	2	[0.7]	142	297
中学年	3年	37	5	96	(34.4)	99	279
	4年	54	5	96	[32.0]	79	183
高学年	5年	90	9	202	(72.4)	44	279
	6年	103	9	202	[67.3]	33	77
計	286	14	300	(35.0)	545	12	557
					(65.0)		

(注1) 単式は単式学級、複式は複式学級の略である。

(注2) 2年・3年の複式学級担任の女性教師1人を削除した。

(注3) 表内の数値は人数、()内の数値は各学年担任者に占める男性教師あるいは女性教師の比率、[]内の数値は男性教師あるいは女性教師における各学年担任者の占める比率。

(注4) 学年(低学年、中学年、高学年)と教師(男性教師、女性教師)の3×2のカテゴリーに基づく χ^2 検定： $\chi^2=326.47, df=2, p<.001$ 。

普通学級の担任の男女別人数を学年別に記入するよう求めた。なお、複式学級の場合は、複式学年の明示を求めた。

3. 結果

857学級の担任に関して、教師の性と担任学年を考慮しながら、担任学年配置の実態を示したのが表1である。そして、各学年担任者に占める男性教師と女性教師の比率を示したのが表1の中の()内の数値であり、男性教師あるいは女性教師における各学年担任者の比率を示したのが表1の[]内の数値である。

男性教師と女性教師の比率は35.0%と65.0%であるが、この比率で担任学年配置が行われている学年は中学年だけである。低学年の担任として配置されているのは女性教師が圧倒的に多く(99.3%)、逆に、高学年の担任として配置されているのは男性教師が非常に多い(72.4%)。また、男性教師は低学年に配置されることはほとんどなく(0.7%)、高学年に配置されることが多い(67.3%)のに対して、逆に、女性教師は高学年に配置されることは少なく(13.8%)、低学年に配置されることが多い(53.3%)

第 2 調 査

1. 目的

女性教師の間に、担任学年配置に関するステレオタイプの態度が存在するかどうかを解明し、もしステレオタイプの態度の存在が証明されたならば、それが特性変数(年齢や性度)や認知変数(男性教師や女性教師の指導能力に対する認知など)によって説明できるかどうかを検討する。

表2 有効回答者の内訳

	f (%)
担任学年	低学年 165 (55.9)
	中学年 88 (29.8)
	高学年 42 (14.2)
年齢	20~29歳 66 (22.4)
	30~39 60 (20.3)
	40~49 110 (37.3)
	50~59 38 (12.9)
	NA 21 (7.1)
学校規模	3~5学級 18 (6.1)
	6~11学級 123 (41.7)
	12~17学級 54 (18.3)
	18~23学級 34 (11.5)
	24学級以上 44 (14.9)
NA 22 (7.5)	

2. 方法

(1) 調査対象 島根県松江教育事務所管内(2市14町1村)の全公立小学校89校において普通学級を担任する全女性教師557人を調査対象とした。

(2) 調査手続き 質問紙を用いて、郵送調査法によって、1980年10月に調査を実施した。有効回収票は295票で、有効回収率は、53.0%であった。有効回答者の内訳を表2に示した。

(3) 調査内容 調査内容の概要は次の通りである。

- ①担任学年 低学年、中学年、高学年の3回答肢(表2参照)
- ②担任希望学年 低学年、中学年、高学年、特に無しの4カテゴリーで整理。
- ③女性教師適任学年の認知 低学年、中学年、高学年、特に無しの4カテゴリーで整理。
- ④男性教師適任学年の認知 低学年、中学年、高学年、特に無しの4カテゴリーで整理。
- ⑤女性教師の指導能力の認知 深谷・深谷(1971)や池田・福山(1971)を参考に、教師の指導能力に関する特性を12個用意し、5段階(1~5点)で評定させた(表6参照)。
- ⑥男性教師の指導能力の認知 ⑤と同じ(表6参照)。
- ⑦担任学年配置の現状を図示し、それに対する反応を3回答肢(予想通り、予想外、何とも思わない)によって求めた。
- ⑧女性教師の低学年配置の現状に対する評価 女性教師の低学年配置という現状に対する評価を4回答肢(自然なことだ、仕方のないことだ、何とも思わない、これではいけない)によって求めた。
- ⑨女性教師の低学年配置に対する原因認知 女性教師の低学年配置という現状の原因を、a. 女性教師自身の希望、b. 学校の要望・習慣・伝統、c. 地域(P.T.A)の要望の3つの影響源について、4段階(非常に影響している:4点~まったく影響していない:1点)で評定させた。
- ⑩性度 多田(1974)の性度尺度から、男性的であって女性的でない特性を5個と、女性的であって男性的でない特性を5個の合計10個の特性を抽出し、4段階(1~4点:女性度大の極が4点)で評定させた(表8参照)。
- ⑪年齢 満年齢の記入(表2参照)。
- ⑫学校規模 勤務先の小学校の学級数の記入(表2参照)。
- ⑬その他 省略

以上の調査内容は、複数の質問項目を組み合わせ整理するものもあるので、必ずしも個々の具体的な質問項目や回答形式とは対応しない部分もある。

3. 結果

(1) 適性配置感

女性教師の担任学年と担任希望学年の関係から適性配置感を推定しようと試みた。実際の担任学年と担任希望学年が一致する場合および担任希望学年が特に無い場合を適性配置感がある者、また実際の担任学年と担任希望学年が矛盾する場合を適性配置感を持たない者と判断した。後者の適性配置感を持たない女性教師の人数を、担任学年別に整理したのが表3である。適性配置感を持たない女性教師は、全体で19.7%みられるが、その出現率は担任学年によって若干異なり、中学年に比べて低学年と高学年で出現率が大きい傾向がある ($\chi^2=5.76, df=2, p<.06$)。そして、適性配置感を持たない女性教師の絶対数は、中学年と高学年に比べて、低学年の方が多い ($\chi^2=2.24, df=2, p<.001$)。

表3 適性配置感を持たない女性教師

	担任学年			全体
	低学年	中学年	高学年	
	37	10	11	58
	(22.4)	(11.4)	(26.2)	(19.7)

(注1) 表内の数値はf, ()内の数値は%。

表4 担任希望学年、女性教師適任学年認知および男性教師適任学年認知

	低学年	中学年	高学年	特に無し
担任希望学年	108 (36.6)	106 (35.9)	36 (12.2)	45 (15.3)
女性教師 適任学年認知	183 (62.0)	18 (6.1)	1 (0.3)	93 (31.5)
男性教師 適任学年認知	9 (3.2)	13 (4.6)	209 (73.6)	53 (18.7)

(注1) 表内の数値はf, ()内の数値は%。

(注2) 男性教師適任学年認知についての分母はN=284である。女性教師適任学年認知との差の検定は、N=284で行った。

表5 ステレオタイプ群と非ステレオタイプ群

		男性教師適任学年認知			
		低学年	中学年	高学年	特に無し
女性教師 適任学年 認知	低学年	2	9	158	4
	中学年	1	2	15	0
	高学年	0	0	1	0
	特に無し	6	2	35	49

(注1) 表内の数値は人数, N=284。

(2) 担任学年配置に関する女性教師のステレオタイプの態度

一般論として女性教師にはどの学年が担任しやすいかという女性教師適任学年認知と、女性教師自身が個人的にどの学年の担任を希望しているかという担任希望学年との関係を示したのが表4の上2欄である。女性教師適任学年として認知されているのは、低学年が圧倒的に多く、中学年と高学年は非常に少ない ($\chi^2=300.20, df=2, p<.001$)。このように、低学年を一般的に女性教師の適任学年であると認知する傾向は、個人的な担任希望学年を比較基準として検討した場合でも、有意に大きい ($\chi^2=29.75, df=9, p<.001$)。すなわち、担任希望学年に比較して、女性教師適任学年として低学年がより多く認知され、中学年と高学年はより少なく認知されている。なお、特に無しという回答もより多くなっている。以上の結果から、女性教師の間に、“女性教師は低学年向き”であるというステレオタイプの態度が存在すると推論できる。

女性教師適任学年認知と、一般論として男性教師にはどの学年が担任しやすいかという男性教師適任学年認知を比較したのが表4の下2欄である。男性教師適任学年として認知されているのは高学年が圧倒的に多く、低学年と中学年が少ない ($\chi^2=339.53, df=2, p<.001$)。男性教師適任学年認知は、女性教師適任学年認知と全く逆の傾向を示している ($\chi^2=119.72, df=9, p<.001$)。この高学年を一般的に男性教師の適任学年であると認知する傾向は、低学年を一般的に女性教師の適任学年であると認知する傾向と同等以上に強いので、女性教師の間に“男性教師は高学年向き”であるというステレオタイプの態度が存在すると間接的に推論できる。

女性教師の間に“女性教師は低学年向き”であるというステレオタイプの態度と“男性教師は高学年向き”であるというステレオタイプの態度が存在する可能性が推論されたが、本研究では、これら2つの態度は表裏一体をなして、担任学年配置に関するステレオタイプの態度を構成していると考えてきた。そこで、女性教師適任学年認知と男性教師適任学年認知の相互関係を表5に示した。表5において、女性教師適任学年は低学年で、かつ、男性教師適任学年は高学年であると回答した158人(55.6%)の女性教師こそ、担任学年配置に関する典型的なステレオタイプの態度(“女性教師は低学年向き”で“男性教師は高学年向き”)をもつ女性教師である。これに対して、女性教師適任学年も男性教師適任学年も特に無いと回答した49人(17.3%)の女性教師は、担任学年配置に関するステレオタイプの態度を全く持たない女性教師である。したがって、

以後、前者の女性教師をステレオタイプ群（S群と略称）、後者の女性教師を非ステレオタイプ群（NS群と略称）と呼ぶ。

(3) 教師の指導能力に対する認知

男性教師の指導能力に対する認知得点と女性教師の指導能力に対する認知得点とを比較した結果は次の通りである（両得点間の差はt検定の結果、全て0.1%水準で有意）。男性教師に比べて、女性教師の長所として認知された指導能力特性は、「子供への細かな配慮」、「子供にとっての親しみやすさ」、「子供への接し方」、「仕事への取り組み方」の4特性であった。逆に、男性教師に比べて、女性教師の短所として認知された指導能力特性は、「ユーモア性」、「企画力」、「全体的見通

し」、「情緒安定性」、「専門的な知識」、「家事・育児による仕事の妨げ」、「同僚の先生への依存度」、「視野の広さ」の8特性であった。

教師の指導能力に関する12個の特性の構造を検討するために、男性教師の指導能力認知得点と女性教師の指導能力認知得点を延べ数的に処理し（ $N=278 \times 2=556$ ）、主成分分析法による因子分析を行った結果（バリマックス回転後の因子負荷量）を表6に示した。2個の因子が抽出されたが、三隅（1978）のリーダーシップPM理論の枠組みを援用し、第1因子は「P的指導能力」因子、第2因子は「M的指導能力」因子と解釈した。そして、因子負荷量が-1の値をとる特性については得点の方向を逆転させることによって、第1因

表6 教師の指導能力に関する因子分析の結果
(バリマックス回転後の因子負荷量)

	I	II	共通性
3. 企画力(優れている)	.815	-.066	.669
11. 視野の広さ(広い)	.806	-.106	.661
5. 全体的な見通し(優れている)	.799	-.053	.641
2. ユーモア性(優れている)	.783	-.008	.613
9. 家事・育児による仕事の妨げ(多い)	-.686	.457	.680
7. 情緒安定性(安定している)	.666	.243	.503
8. 専門的な知識(優れている)	.662	.252	.502
10. 同僚の先生への依存度(高い)	-.615	.259	.445
4. 子供にとっての親しみやすさ(優れている)	.208	.756	.615
1. 子供に対する細やかな配慮(優れている)	-.340	.753	.683
12. 仕事への取り組み方(誠実である)	.109	.740	.559
6. 子供への接し方(やさしい)	-.119	.654	.442
因子寄与	4.573	2.441	7.014
因子寄与率	38.1	20.3	58.4

表7 女性教師と男性教師の
P的指導能力およびM的
指導能力に対する認知

	女性教師	男性教師
P的 指導能力	22.38 (3.38)	30.09 (3.75)
M的 指導能力	15.28 (2.09)	12.34 (1.97)

(注1) 表内の数値はM, ()内の数値はSD。

(注1) ()内の方向の反応に高得点を与えた。

表8 性度に関する因子分析の結果
(バリマックス回転後の因子負荷量)

項 目	I	II	III	IV	共通性
10. 情緒が安定している方だ	.787	-.144	-.071	.078	.651
2. 決断力がある方だ	.712	.300	.286	-.136	.697
3. 人の助けは借りたくない方だ	.564	.353	-.201	-.072	.488
8. 議論をするのが好きな方だ	-.059	.807	-.020	-.029	.655
6. 率直にものを言う方だ	.335	.729	.073	-.017	.649
5. 室内でする仕事が好きの方だ	-.042	-.132	.771	.001	.614
9. 臆病な方だ	.022	.391	.625	.063	.548
1. 服装に関心が強い方だ	-.093	.040	-.188	.861	.788
7. 物事にこだわる方だ	.264	.025	.436	.623	.649
4. 細かい事に気がつく方だ	-.210	-.288	.390	.520	.550
因子寄与	2.304	1.788	1.145	1.050	6.287
因子寄与率	23.0	17.9	11.4	10.5	62.9

子に属する8個の特性の得点とをP的指導能力認知得点、第2因子に属する4個の特性の得点とをM的指導能力認知得点とした。

女性教師のP的指導能力認知得点あるいはM的指導能力認知得点と男性教師のP的指導能力認知得点あるいはM的指導能力認知得点とを比較した結果が表7である。P的指導能力は、女性教師よりも男性教師の方が有意($t=26.80, df=277, p<.001$)に高く認知されており、M的指導能力は、男性教師よりも女性教師の方が有意($t=19.73, df=277, p<.001$)に高く認知されている。

(4) 担任学年配置の現状に対する認知

第1調査で明らかになった担任学年配置の現状に対する認知は、「予想通り」が93.8% (274人)、「予想外」が4.8% (14人)、「何とも思わない」が1.4% (4人)であり、大多数の女性教師が現状を予想通りと認知していた(分母は $N=292$)。

女性教師が低学年に配置されるという現状に対する評価をみると、「自然なことだ」が32.2% (91人)、「仕方が無い」が19.1% (54人)、「これではいけない」が42.4% (120人)、「何とも思わない」が6.4% (18人)であり、現状に対する批判的評価を行う女性教師は42.4%と半数に達しなかった。

女性教師の低学年配置に対して、①女性教師自身の要望②学校側の要望・習慣・伝統、③地域(PTA)の要望といった3種類の影響源がどの程度影響を及ぼしているかという認知を検討した。その結果、学校($M=3.31, SD=0.78$)、女性教師自身($M=2.63, SD=0.81$)、地域

($M=1.85, SD=0.90$)の順に影響度が大きいと、女性教師は認知していた($N=259: F=227.47, df=2/516, p<.001$)。

(5) 性度

性度の構造を検討するために、性度得点に関して主成分分析法による因子分析を行った結果(バリマックス回転後の因子負荷量)を表8に示した。4個の因子が抽出されたが、ここではあえて因子の命名は行わなかった。なお、それぞれの因子に属する項目の得点とをその因子に関する得点とした。

(6) ステレオタイプ群と非ステレオタイプ群の比較

担任学年配置に関するステレオタイプの態度が、特性変数や認知変数とどのような関係にあるのかを明らかにするために、それらの変数に関するS群とNS群との差の検定を試みた。その結果、有意差のみられた変数についての結果を表9に示した。

特性変数に該当する、年齢、学校規模、性度、担任学年、適性配置感の5変数に関しては、S群とNS群との間に有意差はみられなかった。担任希望学年に関しては、S群は、NS群に比べて、低学年の担任を希望する者が多く、高学年の担任を希望するものが少ない($\chi^2=13.20, df=3, p<.01$)。

認知変数に該当する教師の指導能力認知および担任学年配置の現状に対する認知についての分析結果は次の通りである。教師のP的指導能力認知得点に関してステレオタイプ要因と認知対象となる教師の性要因の2要因の分散分析を行った。その結果、教師の性要因の主効果が有意($F=24.44, df=1/195, p<.001$)で

表9 ステレオタイプ群と非ステレオタイプ群の比較

		S群	NS群
担任希望学年	低学年	62(39.2)	13(26.5)
	中学年	62(39.2)	20(40.8)
	高学年	11(7.0)	12(24.5)
	特に無し	23(14.6)	4(8.2)
P的指導能力	女性教師	21.93(3.09)[149]	22.73(4.16)[48]
	男性教師	29.91(3.32)[149]	29.98(4.48)[48]
M的指導能力	女性教師	15.20(1.93)[149]	14.40(2.21)[48]
	男性教師	12.07(1.78)[149]	13.04(2.43)[48]
女性教師の低学年配置の現状評価	自然なことだ	57(37.3)	8(17.4)
	仕方が無い	32(20.9)	9(19.6)
	いけない	56(36.6)	23(50.0)
	何とも思わない	8(5.2)	6(13.0)
女性教師の低学年配置の影響源認知	女性教師自身	2.72(0.79)[141]	2.39(0.80)[41]
	学校	3.28(0.77)[141]	3.41(0.71)[41]
	地域社会	1.83(0.08)[141]	1.80(0.78)[41]

(注1) 表内の数値は、 M と(SD)と(N)、あるいは f と(%)。

あった。すなわち、女性教師のP的指導能力よりも、男性教師のP的指導能力の方が高く認知されている。

教師のM的指導能力認知得点に関して、ステレオタイプ要因と認知対象となる教師の性要因の2要因分散分析を行ったところ、教師の性要因の主効果が有意($F=131.53$, $df=1/195$, $p<.001$)であった。すなわち、男性教師のM的指導能力よりも、女性教師のM的指導能力の方が高く評価されている。また、両要因の交互作用も有意($F=20.66$, $df=1/195$, $p<.001$)であった。教師の性要因の単純主効果は、S群とNS群の両方で有意($F=128.27$, $df=1/195$, $p<.001$; $F=23.94$, $df=1/195$, $p<.001$)であり、両群とも男性教師のM的指導能力に比べて、女性教師のM的指導能力を高く認知しているが、そうした教師の性によるM的指導能力認知の差は、NS群(1.35)よりもS群(3.13)の方が大である。また、ステレオタイプ要因の単純主効果も、男性教師に対する認知の場合と女性教師に対する認知の場合の両方で有意($F=8.79$, $df=1/390$, $p<.01$; $F=6.01$, $df=1/390$, $p<.05$)であった。しかし、ステレオタイプ要因の単純主効果の方向は、男性教師に対する認知の場合と女性教師に対する認知の場合とで全く逆であった。すなわち、男性教師のM的指導能力に関しては、S群はNS群よりも低く認知し、女性教師のM的指導能力に関しては、S群はNS群よりも高く認知している。

担任学年配置の現状に対する認知に関しては、S群とNS群の間で差はみられなかった。ところが、女性教師の低学年配置という現状に対する認知に関しては、S群とNS群の間に有意差($\chi^2=8.97$, $df=3$, $p<.05$)が存在し、S群はNS群に比べて、現状を肯定的に評価するものが多い。女性教師の低学年配置の影響源に対する認知得点に関して、ステレオタイプ要因と影響源要因の2要因分散分析を行った。その結果、影響源要因の主効果が有意($F=126$, $df=2/356$, $p<.001$)であったが、この主効果の意味は先に述べた通りである。そして、両要因の交互作用の傾向($F=2.85$, $df=2/356$, $p<.06$)が認められた。ステレオタイプ要因の単純主効果は、影響源が女性教師自身の場合にのみ有意($F=5.10$, $df=1/534$, $p<.05$)であり、S群はNS群に比べて、女性教師の低学年配置の原因を女性教師自身の要望によるとより強く認知している。しかし、女性教師の低学年配置の原因が、学校側や地域社会にあるという認知に関しては、S群とNS群との間で差がみられなかった。なお、影響源要因の単純主効果は、S群とNS群の両方で有意($F=58.26$, $df=2/256$, $p<.001$; $F=71.04$, $df=2/356$, $p<.001$)であり、多重比較(Tukey法)の結果、両群において、学校、女性教師

自身、地域社会の順に影響源の大きさを認知していることが示された。ただし、女性教師の低学年配置の影響源としては、女性教師自身よりも学校の方が大きいという認知の差は、S群(0.55)の方が、NS群(1.00)よりも小さくなっている。

全体的考察

第1調査の結果から、女性教師は低学年に、男性教師は高学年に配置されるという担任学年配置に関する実態が明らかとなった。こうした実態は、先行研究(千葉県教育センター, 1969; 池田・福山, 1971)の結果と一致するし、教師の性による担任学年配置の片寄り現象は、これらの先行研究の結果よりもさらに顕著である。これは、教育界、特に担任学年配置を決定する管理職層に、“女性教師は低学年向き”で“男性教師は高学年向き”であるというステレオタイプの態度が存在しなければ起こりえない現象であり、教育界における担任学年配置に関するステレオタイプの態度の存在が実証されたといえる。

実際に、適正配置感を持たない女性教師の割合は中学年担任者よりも低学年担任者と高学年担任者の方で大きく、適正配置感を持たない女性教師の絶対数は低学年担任者の間で最も多い。こうした適正配置感に関する分析結果は、現実の担任学年配置が女性教師にとって望ましい状態でないことを示唆している。

一般的に低学年の担任に適している女性教師が多く、高学年の担任に適している女性教師が少ないと、女性教師は認知している。個人的に女性教師自身の担任希望学年を尋ねたところ、低学年を希望する女性教師の割合は、一般的に低学年の担任に適していると認知された女性教師の割合より小さい。したがって、女性教師の間に、“女性教師は低学年向き”であるというステレオタイプの態度が存在することが実証された。さらに、一般論として高学年の担任に適している男性教師が少ないと、女性教師は認知している。一般的な男性教師の適任学年が高学年であるという認知の片寄りは、一般的な女性教師の適任学年が低学年であるという認知の片寄りと同様以上の極端さを示すので、女性教師の間に、“男性教師は高学年向き”であるというステレオタイプの態度が存在すると推論された。

“女性教師は低学年向き”というステレオタイプの態度と“男性教師は高学年向き”というステレオタイプの態度とは表裏一体を成して、担任学年配置に関するステレオタイプの態度を形成していると考えられることから、上記の2つのステレオタイプの態度を両方に有する典型的なS群と、上記の2つのステレオタイプの態度を全く持たないNS群との比較を通して、

担任学年配置に関するステレオタイプの態度の規定因を推論しようと試みた。その結果、NS群に比べてS群は、女性教師のM的指導能力を過大視し、男性教師のM的指導能力を過小視していることが判明した。担任学年配置に関するステレオタイプの態度は、M的指導能力に関して、女性教師を過大評価し男性教師を過小評価することと深く関係することが明らかとなった。本研究で得られたこれらの結果は、担任学年配置に関するステレオタイプの態度が、女性教師の母性的資質に対する積極的・肯定的評価によって支えられているという仮定と一致する。

さらに、S群はNS群に比べて、女性教師が低学年に多く配置されるという現状に対して批判的に認知する者が少なく、こうした現状は女性教師自身の要望が原因であると認知することが多く、学校側の要望・習慣・伝統が原因であると認知することが少ない。

ところで、本研究で使用した特性変数はS群とNS群の差を説明しなかった。わずかに、担任希望学年に関して、S群はNS群よりも低学年の担任を希望し、高学年の担任を希望しないことが確認され、自らを“低学年向き”と考える女性教師の間にステレオタイプの態度が強いことが示された。ステレオタイプの態度を説明する特性変数としては、本研究で使用した態度以外に、性役割認知や性役割志向性など性役割に関する次元、さらには、権威主義的パーソナリティなどのパーソナリティ次元が考えられるので、今後検討する必要がある。

以上のように、“女性教師は低学年向き”で“男性教師は高学年向き”という担任学年配置に関するステレオタイプの態度が教育界に存在することが、担任学年配置の現状に関する実態調査の結果から証明された。そして、こうしたステレオタイプの態度は、女性教師自身の間にも認められ、女性教師自身の持つステレオ

タイプの態度が教師の性に基づく担任学年配置の片寄りを促進していると解釈できる。その結果、低学年を担当する女性教師の間で適正配置感が低下してしまうことは好ましいことではない。したがって、適切な担任学年配置を実現するためには、そのためにも、まず、女性教師自身が女性教師および男性教師の個人差を認める姿勢を持ち、また、低学年の担任を希望する仲間の女性教師の割合は30%台にすぎないことを認識することによって、担任学年配置に関する自己のステレオタイプの態度を改善し、教育界全体に広範に存在するステレオタイプの態度の変容を働きかけねばならない。

なお、男性教師、特に管理者層を対象とした調査によって、男性教師＝管理職の間での担任学年配置に関するステレオタイプの態度の強度を検討することが今後の研究課題として指摘できる。

引用文献

- 千葉県教育センター 1969 学校経営の効率に関する研究—女子教員の特質と問題点— 千葉県教育センター研究紀要, 91.
- 深谷昌志 1980 女性教師論—やさしさの再発見— 有斐閣
- 深谷昌志・深谷和子 1971 女性教師問題の研究 黎明書房
- 池田秀男・福山信子 1971 女性教師の職業意識に関する調査研究—徳島市内在職教師の調査報告 徳島大学学芸紀要 (教育科学), 19, 29-57.
- 佐藤守男 1976 男教師と女教師 教育心理, 24, 416-419.
- 多田建治 1974 パーソナリティに於ける男女性の次元の検討 金沢大学教育学部紀要 (人文・社会・教育科学編), 23, 205-218.